

維新史回廊だより

第16号
平成23年
(2011年)
9月発行
年2回発行

■ 編集 総合編集委員会
■ 発行 山口県環境生活部文化振興課

(山口市瀧町一一一 TEL 083-933-2627)

◆はじめに◆

維新史回廊だより第十六号をお届けします。

今号は、第十五号に引き続き、毛利博物館の小山良昌館長の解説による、「幕末の名君 毛利敬親公」の第二回目です。

幕末維新时期、長州藩が時代を変革する原動力となつた背景には、敬親公のどのような政治手腕があつたのか、具体的なエピソードを交えながら御紹介します。

◆幕末の名君 毛利敬親（その二）◆

◎ 敬親公は、どのような方針で人材を登用したのでしょうか？

公の治政下では、従来の門閥主義ではなく、能力による実力主義が芽生えていました。また、優秀な人材も藩士として採用しました。例えば、万延元（一八六〇）年、宇和島藩御雇として活躍中の鋳銭司村出身の地下医者村田藏六を、木戸孝允の推薦により兵学者雇として藩に採用し、慶応元（一八六五）年には高百石の大組士として藩士に取り立てています。

文久三（一八六三）年一月には、足軽中間出身で松陰門下生の入江九一、山縣小輔、品川弥二郎、杉山松助を、「吉田松陰の尊攘の大儀を弁じ志行嘉べし」として終身土雇に昇格させ、次いで同年三月には、足軽出身の伊藤春輔を、同じく終身土雇に昇格させました。

彼等昇格組の活躍が顕著であつたためか、同年六月、藩は新たに「人材登庸令」を発して人材の発掘に乗り出しました。その結果、七月一日付では陪臣の赤根武人をはじめ、白井小助、林半七、堀平三郎、野村和作、同月六日付で下関の豪商白石正一郎を三十人通の藩士、吉田稔麿を土雇として昇格させました。

これら、藩士に登庸された人たちは、足軽中間、あるいは陪臣、農町民の出身で、本来ならあり得ない人事でした。優秀な人材として登庸された彼等

の多くが、幕末期の尊皇攘夷運動、維新回天事業に関わって活躍し、維新後の明治時代には各界で十二分に実力を發揮したことは広く知られています。

◎ 情報収集にも積極的だったということですが。

公が家臣の上下を問わず「茶席」に招き、幅広く意見を徵し、また、国内はもちろん広く海外の情報についても積極的に収集し、藩を治める上で参考にしたことは為政者としても極めて有能な藩主であつた証と言えるでしょう。一般的には、城内に於いて藩主に接見が可能な人物は、家臣の中でもごく限られた高官だけで、一般の家臣が直接藩主と会話する機会はまずあり得ないませんでした。

ただし、「茶室」だけは例外的に扱われ、身分階級は無関係に招き入れ、茶を飲みながら自由に接見することが可能な場所とされていました。そこで公は、萩城内に設けた茶室「花之江亭」に家臣を招き、家臣の話題にも熱心に耳を傾けたので、接見を果たした家臣の多くは、公の人間性に魅了され、信頼し尊敬したのでした。

一方、公は外国に関する情報の収集にも積極的でした。

安政元（一八五四）年、幕府が蝦夷地・権太の巡視を行い、日露国境の確認を行つた際、山県半蔵（宍戸璣）を便乗させ、蝦夷地の実状を報告させました。

万延元（一八六〇）年日米修好通商条約の批准のため、幕府が使節を派遣した際には、北条源蔵をその一行に随行させ、米国の進んだ文明社会の様子をつぶさに報告させています。



旧萩城趾内の花之江亭（萩市）

欧洲各国の状況については、翌文久二（一八六二）年、幕府による遣欧使節派遣の際に、小姓役であった杉孫七郎を使節団一行に押し込み、英仏蘭国をはじめ各国の情報収集をはかりました。

杉孫七郎は各国の状況について、訪問先から度々報告書を送り届けているが、例えば英國からの報告書には、「英國強大 万國に秀出する事申迄も無之候え共 武備諸工作場に至迄殊の外盛んで 神州と雖も二百年大平の弊風を守り 因循に打過候ては併呑せらるるも難計候」

孫七郎の報告書を読んだ藩の首脳らは、攘夷が不可能であることを確信するとともに、天皇の御意向に沿って攘夷運動に走るわが藩の現状を鑑みて、危機感を抱いたに違いありません。賢明な公や重役の周布政之助らは、

攘夷戦争 → 敗北 → 終戦処理 → 講和条約 → 国交開始
の図式を描いたことと思われます。そこで、藩首脳の出した次善の策が、攘夷戦争後に備えて、進取の気に富んだ家臣を密かに外国へ留学させて、情報収集をはかり、語学を習得させることでした。すなわち、文久三（一八六三）年五月、いわゆる「長州ファイブ」の英國派遣に至ったのです。

なお、世子の小姓役を務めていた高杉晋作も、幕府の使節船に便乗して、文久二（一八六二）年一月から約半年間中国の上海に派遣され、歐米列強に植民地化される寸前の中国の実状について、藩の要路に詳しく報告しています。

このように、公は国内外の状況について幅広く収集をはかり、特に、外国の状勢については十二分に詳細な知識を持っていました。その知識は、元治元（一八六四）年四国連合艦隊の馬関来襲以後、英國を中心とする諸外国との密接な関係を結ぶなど、藩政に大きく反映されました。

◎ 敬親公は、どのように先見性を發揮しましたか？

公は、正室都美子（とみこ）、側室の花里（はなさと）との間に一男三女をもうけましたが、いず



長州ファイブ (萩博物館蔵)

れも夭逝しています。

そこで、嘉永四（一八五二）年八月、長府毛利家から八才になる銀姫を養女に迎え、同年十一月には、徳山毛利家から藩主元蕃の弟明敬十二才を養子に迎え入れました。この長府・徳山両末家間には、江戸時代の初期に離婚問題が起きて以来、必ずしも良好な関係ではありませんでしたが、両家から宗家へ養女、養子に入つたことは、両末家の関係改善を進めたことでしょう。

さらに、安政元（一八五四）年公はこの明敬を婿養子と定め、正式に世子としました。すなわち、明敬を次期の萩藩主と定めたのです。従来、長府毛利家からは五代吉元、七代重就が宗家を継いでいますが、徳山藩からは一人も宗家を継いだ者がいなかつたので、この世子就任は徳山藩にとつてこの上ない慶事でした。

安政五（一八五八）年一月、公の命により、世子明敬と銀姫が華燭の典を催し、晴れて結婚したのです。後の元徳・安子御夫妻です。この結婚により、宗家を親とし、長府・徳山毛利家を子とする強固な三角関係が構築され、毛利本藩と支藩の関係はこの上ない紐帶で結ばれることとなりました。このことは、毛利元就による「三子教訓状」を彷彿させる施策で、公による「新たな三矢」の構築でもありました。

さらに、文久三年（一八六三）には、世に云う「八月十八日の政変」が起こり、萩藩勢が京都・朝廷から一掃される大ピンチを迎えた際には、新たに岩国領主吉川経幹の次男重吉を養子縁組して、両国内を身内で固めたのです。

この毛利本家を中心とした「新たな三矢」に吉川氏を加えて、防長両国が一丸となつて結束した結果、来る四境（幕長）戦争など対外戦に勝利し、明治維新へと時代を動かしていく大きな原動力となつたのです。

維新回天の成功は、公の先見性の勝利、と言つても過言ではないでしょう。

◎ 敬親公の卓越した先見性を示すエピソードは？

公の先見性は、薩長同盟後の薩摩藩との交渉に關わる事例に見ることがで

きます。

慶応二（一八六六）年、薩長同盟が成立したのち、黒田清隆使節一行が山口を訪れ、敬親公にもお目に見えして大歓迎を受けました。そこで、萩藩から

も答礼使を派遣することとし、木戸孝允が正使に選ばれ、公から詳しく述べ訓令を授けられました。さて、出発を翌日に控えた前夜、急に呼出を受けた木戸は、さらに公から以下のような注意が与えられました。

「薩摩に行けば、同盟を理由に馬関海峡の封鎖について提案があるかも知れない。その場合、決して承諾してはならない。馬関海峡は天下の公海である。その公海を封鎖して天下の人を苦しめ、自己の功業を成そうとする姑息な手段は、私の信念に反する。公明正大は私の信条だから、例え同盟が破れても絶対に賛成してはならぬ」

と強く念を押されたのです。

さて、薩摩を訪れた木戸一行は薩摩藩主に接見し、西洋料理を馳走され大歓迎を受けました。その歓迎の宴たけなわの最中、薩摩側から突然、

「連合をしたからには、早く馬関海峡を封鎖し、天下を^{こうせい}控制しようではないか」

と提案されました。木戸は、公から指摘された点はこれだなと思い、しばらく考えたのち、「馬関を封鎖すると上国との交通を断つことになる。そうすれば、天下の人々が難儀をすることになるので、それはできません、お断りします」と、きっぱり断りました。思いも懸けない拒否にあって、座中は急にしらけて静まりかえりました。その内、時間を置いて「まあまあ」となって、最後には無事宴を終えることができ、一同胸をなで下ろしました。

公の公明正大な信念とその先見性について、あの木戸孝允が指導者としての生き方を学んだ、と伝えています。

◎ 敬親公が下された最大の政治的判断は何でしょうか？

文久元年（一八六二）年三月、藩は長井雅楽の唱えた公武合体策「航海遠略策」を藩是と定め、長井に朝廷、幕府間の調停を行わせたところ、朝廷、幕府共に賛同を得て、成功寸前まで至っていました。ところがその間、久坂玄瑞らの尊皇攘夷派は、「公武合体は幕府を利するだけ」と反対して勢力を増し、やがて、孝明天皇の御意向も「攘夷」であることが明らかになりました。

そこで、文久二年（一八六二）七月、天皇の御意向を受けて、京都の長

州藩邸では御前会議が開かれました。重役による四、五日間に及ぶ激論の末、天皇の御意向に沿う形で「即今攘夷」を定め、八月には「条約破却」の方針を決定したのです。

この決定は、従来徳川幕府が進めてきた「外国との和親」および「条約の締結」に公然と反対する立場を表明するものでした。

時の為政者であり、絶対的な権力者でもある徳川幕府の意向に逆らうことの決定によって、幕府の怒りに触れて毛利家が忽ち成敗されることは十分に考えられたのです。敬親公としては「湊川における君臣楠正成」の心境だつたのではないでしょうか。

この決定が國元萩へもたらされたところ、そのような決定は幕府による

「改易」^{かいえき}を招くと、家臣たちからも大反対の声が上がったのです。その反対意見を「因循論」あるいは「俗論」と称しました。

本藩の場合、因循論派を何とか押さえたのですが、支藩の長府藩や岩国領内でも、藩主をはじめとしてこの因循論が大勢を占めていました。そこで、公は家臣の小田村伊之助に親書を持たせ、各支藩主の説得に当たらせたのです。特に岩国では、領内を挙げて反対に及んでいたので、説得に説得を重ね、領主の吉川監物とも激論を戦わせてようやく説得しています。

長府藩での説得も困難を極め、藩主元周は「重病」を理由に接見を拒んだのです。そこで、小田村は「長府公が一息たりとも御生命のある間は、御面会して公命を伝えなければならぬ」と、強引に病床に行き説得を試みています。かくして長府藩の賛同も得、次いで徳山藩での説得を終えて、ようやく両国内の意思統一に成功したのです。

この両国内の意思統一に成功したことが、後の四境戦争の際、防長両国が一致団結して勝利を勝ち取った大きな要因となつたのです。

◎ 朝廷との関係はどのようなものだったのでしょうか？

毛利家の遠祖が皇族であることから、毛利家は朝廷には特別な思い入れがありました。特に幕末の動乱期、藩主敬親は天皇の御意をうけて忠勤を励み、朝幕間を周旋し、終始一貫天皇の御意に従つて攘夷運動を進め、朝廷の威信回復に意を注いでお仕えしてきました。

しかし、幕末の過激で複雑な動乱期に、政治的混乱に巻き込まれ、文久三

年八月十八日に起きた政変により、萩藩勢が京都から一掃され、その後「朝敵」の汚名を被つた一時期がありまし

た。やがてその汚名を雪ぎ、多くの犠牲者を出しながらも討幕軍の先頭に立つて維新回天をなし遂げ、新しい時代を迎えています。

明治元（一八六八）年六月、参内して龍顔を拝した公は、天皇から、「内外大難を凌ぎ鞠窮尽力し終

に朝廷をして今日有るに到らしむ偏に汝至誠の致す処感喜述るに辞

との優詔を賜わりました。そして、

同年九月には、従三位・左近衛権中将に叙せられ参議となり、同二年六月には従二位に昇進し権大納言に叙せられたのです。

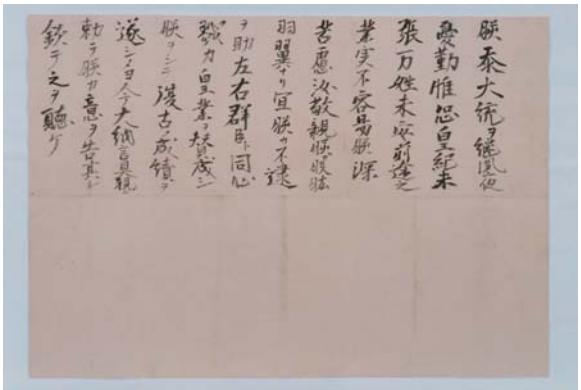
明治二（一八六九）年、天皇の東京遷座に伴い、敬親は旧江戸城の大手門側の神田橋邸（旧酒井直之助屋敷）を下賜され、島津氏とともに天皇をお守りする藩屏として存在することとなりました。更に、明治天皇の宸筆が届き、皇居に出向いて天皇を補弼することを促されたのです。

公としては、皇室のため、新日本国家建設のため尽力する覚悟でしたが、不幸にして病

を得て、明治四（一八七一）年三月、山口において逝去しました。享年五十三才でした。公の逝去にあたり、朝廷は更に従一位を贈つて公の功績を讃えました。



毛利敬親を祀る野田神社（山口市）



明治天皇宸筆勅書 明治2年（1869）明治天皇
から毛利敬親宛（毛利博物館蔵）

忠正神社は、地名により野田神社と改称して県社に列せられ、大正四（一九一五）年には別格官幣社に列せられました。

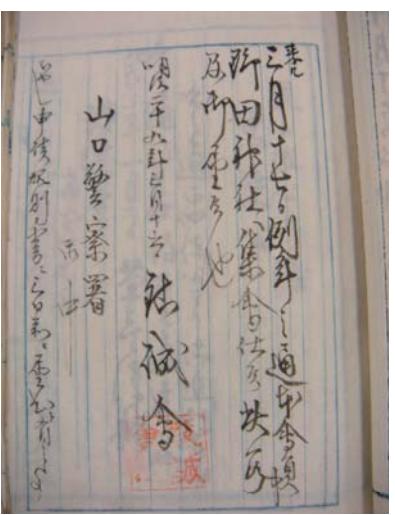
維新回天の快挙は、公の思慮深い政治力、指導力、実行力、先見性、および臣民の全面的な信頼に負うところが少なからずあつたと評価されています。

◎ 敬親公が亡くなつた後の、県内の動向は？

公が亡くなつて十余年経た明治十五・十六（一八八二・八三）年頃、吉田松陰の兄杉民治や重臣の吉田右一ら、公に由緒ある者たちが中心となつて、公の遺徳を追慕崇敬する集まり、「談話会」が組織されました。

この会は忽ち会員数が増加したため、明治二十一（一八八八）年には山口町を核とした周防部と、萩町を中心とした長門部とに分立しました。周防部では「致誠会」と称して、山口致誠会のほか佐波郡致誠会、

熊毛郡致誠会、大島郡致誠会が結成され、長門部では「懐恩会」と称して、萩懐恩会のほか大津郡懐恩会、美祢郡懐恩会が分立し、その活動は昭和二十年まで続きました。



致誠会印影 写真は明治25年の
致誠会日誌（山口県文書館蔵）

これらの会は、毎年春秋二回、総会・例会を開きました。その総会には毛利家の御当主を招き、会場には敬親公の肖像画を掲げて参加者一同拝礼し、公の遺徳に關わる講演会や公爵毛利家の動静等についての報告、会員による余興などがおこなわれました。

この会の会員は旧萩藩士を中心組織されましたが、加えて地方の名士も参加を許されたので、当会会員はすなわち、名士としてのステータスシンボルでもあつたのです。

【あとがき】

維新史回廊だよりは、県内各市町の文化振興担当課や博物館・資料館、県政資料館に置いています。バックナンバーは、維新史回廊ホームページ <http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/gyosei/bunka-s/ishin/index.html> でご覧いただけます。次号発行は来年3月中旬の予定です。お楽しみに。